



生きる力を育む

副校長 小泉 美樹

9月28日(木)～29日(金)に、5年生の「姫木平移動教室」がありました。参加した児童は、姫木平で5年生の仲間や先生と1泊2日を過ごしました。見学や体験学習だけでなく、「自分のことは自分です」「友達と協力して生活する」など、自立・協調・協働等、助け合い学び合う機会が多くあったことと思います。それは移動教室当日だけでなく、事前学習から始まり、事後の学習にも経験が生かされることと思います。これからの世の中を生きていく子どもたちに必要な力「生きる力」を身に付けさせる学びだと思えます。移動教室では保護者の皆様に、たくさんのお力をいただきました。感謝申し上げます。

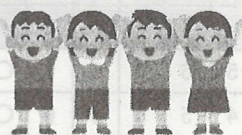
私は、子どもたちに「これからの世の中で、自分の人生を生き抜いていく力」を身に付けてほしいと思っています。人は、決して一人の力だけで生きているとは思いません。家族をはじめ、その時々知り合った人など、一緒に過ごしている人々と関わり合いながら生きているのではないのでしょうか。

時代を生き抜いていくために必要なのは、他者に認められて得られる「自信」だと思えます。そして常に「なりたい自分」を思い描くことができていることだと思えます。そのためには、「できる自分」「必要とされている自分」という「より良い自分のイメージ」をもてるのが大事です。自分の価値を自分で認めることができた時に、なりたい自分に気付くことができるのだと思えます。



「ぼくって こんなことが できたんだ・・・」

この言葉は、他校の通常の学級から特別支援学級に転校してきた5年生の子が、学級の体育で、低学年から高学年までの子どもたち全員で取り組める運動ゲームを発案して授業で発表し、学級全員や先生方に「楽しく運動できる！」と褒められ感謝された子が、思わずといった感じでつぶやいたものです。私は長い間、特別支援学級の担任をしていました。その時の様子が印象的で、よく覚えています。とても嬉しそうに、そして他者を気遣いながら生き生きと活動していました。自分のゲームをみんなに覚えてほしいと、その良さを相手に合わせて分かるように親切丁寧な説明する姿に、「この子は周りのこともよく見えていた。」と、感心したことも思い出されます。通常の学級から特別支援学級への転入生のほとんどが、自分を他者と比較して自信を失っているという現状があります。そして「なりたい自分」のイメージを思い描くことが難しくなっています。「みんなと違って自分には何もできない。」と、思ってしまったのです。何としても「できる自分」を実感させて自己肯定感を高め「必要とされている自分」にも気付かせて自己有用感も高め、自立して意欲的に生活している自分が大事な存在であることを意識させたいと、当時からずっと思い続けています。



自己肯定感や自己有用感は、自分という「土台」を作るのに必要な心情だと思えます。それは人との関わりの中で培われます。自分が相手に認められたり、相手を認めたりする経験が積み重ねられることにより、お互いに生きる力を向上させていくことができるのだと考えています。学校での協働学習もその一つです。その活動を通して、一人ひとりが自分を自分で認めて「自信」が身に付いていくのだと思えます。

子どもたちの生活の中では、親子、親戚、友達、先生、安全を見守る人、近所の人、お店の人・・・と様々な人々との関わりがあると思います。関わりの中で、相手に不快な思いをさせる言動や行動をしていたのでは、良い関係づくりはできません。お互いに認め合うことのできる関係をつくるためには、相手の立場に立って物事を考え、温かい言葉かけを意識しながら、思いやりをもって接することが大事です。協力し合いながらお互いに生きる力を伸ばしていくためには、良い関係と環境が必要であると思えます。

「自信」は、「これができたから、あれもできるかもしれない。」という意欲となり、生きる力の源となると考えています。そして、自分の人生を力強く生きぬいていくことのできる力となり「自立」していくことができるのだと思えます。

